

# 文房具支援物資の配送報告書

2011年7月5日  
寺岡おやじの会  
善波 昭宏

シャチハタ様からご提供いただいた支援物資の受け渡しが完了しましたので、下記の通りご報告いたします。

## ■ 支援物資分配の概要

### 女川町立第一保育所

配送日： 6月26日

分配内容：ペンセット240セット、消しゴム360個、鉛筆420セット

### 女川災害対策本部

配送日： 7月1日

分配内容：ペンセット600セット、消しゴム600個、鉛筆300セット

### 多賀城市 天真小学校

配送日：6月30日

分配内容：ペンセット240セット、消しゴム240個、鉛筆360セツ

※女川町立第一保育所にお渡しした分は、第二保育所へも分配され、  
また、女川災害対策本部にお渡しした分は、女川第一小学校、  
第二小学校、第一中学校に分配されたことと思います。

## ■ 配送時の状況など

### 女川町立第一保育所への配送

この日は、南三陸町の「福興市（復興市）」での写真撮影ボランティアの後に女川町に入りました。 活気のある福興市の後に訪れたの女川町は、とても静かで、また寂しく感じましたが、これが現実であることを実感しました。

保育所は、GW前に私たちが「おやじ鉄板炊出し隊」として訪れた時には、100名以上の方が避難生活を送っていましたが、仮設住宅の建設も進み、現在では70名に減っていました。



避難所となっているこの場所は、本来は保育所。4月からの保育所生活を楽しみにしていた子供たちの気持ちを思うと、気の毒でなりません。そんな子供たちのために、現在は臨時にクラスを開いているとのことでした。

ご提供あった文房具は、この臨時クラス、あるいは、今後の保育所生活の中で使われることになると思います。

保育所の先生方からは、たくさんの感謝の言葉をいただきました。

## 女川災害対策本部への配送

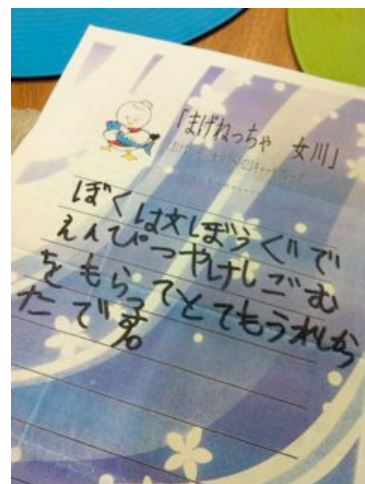


女川第一保育所と同じ日に配送しましたが、当日、担当の方との連絡が取れず、別の方から「文具の支援は間に合っている」と伝えられ、自宅に持ち帰りました。

被災地の小中学校に対しては、文科省からの支援物資がたくさん届いているという話をあちらこちらで聞いており、また、支援のお話をしてから1か月以上も間が開いたので「以前は必要だったが、現在は不要」ということだろうという理解でした。しかし、後日に担当の方に、持ち帰った件をお話したところ、「やはり必要です」ということになり、7月1日に再度女川を

訪れ、無事、お渡しすることができました。

ご提供の文具は、女川町立の小中学校に分配された様で、先日、お礼の手紙をいただきました。



## 多賀城市 天真小学校への配送

私がメンバーとなっている「寺岡おやじの会」は、東北のおやじの会をつなげる「お父さんたちのネットワーク」を通じて、各地のおやじたちとつながっています。

天真小学校への配送は、このネットワークで知り合った一人の「おやじ」にお願いしました。

天真小学校は、津波の影響は無いものの、ご家庭で被害を受けられた方が多くおり、小学校の隣にある野球場のグラウンドには、仮設住宅が建てられています。受け渡しは、PTAの本部会議が開かれている中で行われ、校長先生をはじめ、PTAの皆様からも感謝の言葉と大きな拍手をいただいたとのこと。天真小学校への分配数は、児童数に達していないものと思われそうですが、平等に分配していただけたと思います。

### ■所感

文具物資のご提供を受けられるとのお知らせに、真っ先に手を挙げ、そして、次の日には、現地の方に文具をお届けする旨を伝えていました。しかし、実際にお渡しが出来たのは1か月以上先のことになってしまいました。

「必要なものを必要な分だけ早く届ける」。これは、被災地への支援活動でとても重要なことですが、いざ自分で、そして個人で行動してみると、なかなか難しいことがわかりました。

今回、配送までに一番時間を要したのは、ご提供先から自宅に送られて来るまでの日数でした。企業として、支援先の妥当性の確認が必要なることは理解できますが、確認は事前に行う事も出来たはずですので、この点の改善は、今後の支援活動に役立つのではないのでしょうか？

一方、「絆が大事なので、私が直接持って行く」ことで、私自身が配送に時間を掛けてしまったのも事実です。特に、小中学校向けの支援は、女川災害対策本部への受け渡しとなり、全く事務的なものでした。担当者とのミスコミュニケーションの件も含め、結果的には直送していただいた方がベターでした。



しかし、保育所へは私が届けることにより、現地の被災者の方と、いろいろなお話が出来、今後も見据えた「絆」が少し見えた点は嬉しく思います。やはり、顔と顔、そして言葉掛けは、人にしか出来ない支援であることを実感しました。

東北の主要都市から離れている三陸地方へのサポートは、これからもずっとずっと続けていかなければなりません。私を含め、個人レベルでの支援には限度がありますが、企業からのご支援を背に動けば、それは大きな力になすはずです。

今回限りではなく、今後も定期的なご支援をいただけますよう、どうぞよろしく願いいたします。

以上